原発性骨髄線維症に伴った脾過誤腫の一例

（内科学第三講座）○武市美鈴、岡田潔、代田常道、林　徹
（外科学第三講座）　増原　章、宇田　治、土田明彦、
青木達哉、小柳泰久
（病理学第二講座）　海老原善郎

【緒言】脾過誤腫は良性の稀な脾腫瘍とされている。現在まで欧米では118例、本邦では65例報告されている。今回我々は、原発性骨髄線維症に合併した脾過誤腫を経験したので報告する。

【症例】71歳　女性　平成７年９月５日初診の原発性骨髄線維症。腹部エコーにて脾腫及び脾門部～下極にhype rechoic lesion を認めた。精査目的にて12月２日当院内科入院。造影CTでは、動脈相では周囲よりややlow～iso densityを呈した。腹部血管造影にて腫瘍血管の濃染像は認められず、下極の動脈に圧排所見が認められた。脾シンチにては、defectとして抽出された。以上より過誤腫及び悪性リンパ腫を疑ったが、確定診断まで至らなかったため、平成８年１月10日脾摘出術施行された。病理の結果、組織は過誤腫と診断された。

【結語】脾過誤腫は報告例も少なく、原発性骨髄線維症に偶発したことは稀であり、ここに報告した。

抗拒絶療法剤15-deoxyspergualinの投与時の末梢血液所見について

（外科学第５講座）
○小崎浩一、岩本　整、内山正美、松野直徒、長尾　桓、
小崎正巳

15-deoxyspergualin(DSG)は日本で開発された抗拒絶療法剤で、他の薬剤に比して自覚的副作用は軽微であり、腎移植後の急性拒絶反応に非常に効果的であるため、最近好んで使われる薬剤である。我々は1990年11月から1996年３月まで腎移植後の急性拒絶反応42症例に79回DSGを投与し、79.7％の有効率を得た。本薬剤使用にあたっての大きな副作用は血小板減少症、白血球減少症、貧血である。これらに対しての治療は、腎移植という特殊な環境下であるため非常に難渋することが多い。DSG投与後の血小板、白血球の変動は、まず血小板が投与後12～14日後に最低値をとるがほとんどが自然に回復した。白血球数は約20日後に最低値をとったが減少著名な症例にはrG-CSF投与で対応した。一方貧血は42症例全例に認められ、投与後６カ月以上持続したものが17症例(40.5％)あった。DSGはALG、OKT-3などに比して副作用は少ないが、貧血の持続が大きな問題であると考えられた。